カナダ文学名作短編小説１：ハワード・オヘイガン「白馬」（Howard O’Hagan, “The White Horse”）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: NAGAO, Chikako メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4289

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

カナダ文学名作短編小説 1
—ハワード・オヘイガン「白馬」
（Howard O'Hagan, "The White Horse"）

学芸学部　国際英語学科　長尾　知子（ちかこ）

要旨：カナディアンロッキーに生きる罠猟師ニックの荷馬ベッドフォードがいなくなった。雪で覆われた山岳地帯で白馬を探すのは至難の業であったが、ニックは大陸横断鉄道の荷物係として活躍した若き日々から半生を共にしてきたベッドフォードを何としても見つけ出さねばならなかった。彼は今や老馬となった伴侶を捜しながら、土地の名に思いを馳せる。何の変哲もない場所に名称がある一方、罠猟師たちが行き交うなだらかな峠には呼び名がなかった。「白馬」は、この峠がいかにして「ベッドフォード峠」という名を獲得するに至るのか、その由来の物語である。新世界開拓の輝かしいシンボルである大陸横断鉄道の線路から遠ざかって山に生きることを選んだ孤独な男たちの友情、ネイミング（名付け）の意義について考えさせられる。

キーワード：カナダ文学、名作短編小説、ハワード・オヘイガン、ネイミング、大陸横断鉄道

ハワード・オヘイガン著「白馬」（邦訳）

山岳地帯で物資を運搬するなら、白馬を一頭、装備に加えるのが得策だ。荷物係[1]は、一日の行程を終えた夕方に荷馬を一斉に放し飼いにするが、夜明けには歩きで荷馬をキャンプ地まで連れ戻す。白馬は、山腹にいても、平地のヤナギの木立に紛れていても、遠くからでも見分けることができ、群れの中でも、白馬以外の鹿毛や栗毛、黒や黄灰色の荷馬たちが、姿を隠して見えない森林の中にいても、ちらりと姿を見せる。

それでも、ニック・ダーバンが荷馬ベッドフォードの失踪を自覚した朝、白い毛色は災いそのものだった。三月の初めで、風はなく、雪が降ったばかりだった。ニックのキャビンは、麓丘と一番東側のロッキー連山との間、リトルヘイ川の分岐点のところに迫り出した小山の上にあり、冬場はその小屋から罠猟に出かけていた。彼は、厚手ウールの上着にスボン、ビーバーの帽子にムース革のミトンとモカシン、雪靴という出で立ちで、ドアの外に佇むと、周囲は一面雪だった。雪はマツの枝にも、山腹の高みに生えるエゾマツやバルサムモミにも積もっていた。雪は氷の張ったクリークに降り積もり、牧草地一面に広がり、目を傷めるほど眩しかった。世界全体が銀色の太陽の周りを回る真っ白な球体に違いないようにニックには思えた。白馬は、一握りの小麦粉のように、雪の中に溶け込んでしまうことだろう。骨も身も、毛も溶けて、消え去り、半透明の日に吸収されるだろう。

ベッドフォードがつけた蹄の跡は、新たな雪で塞がれ、風に均されていた。ここ一週間、ニックのキャビン脇の差し掛け小屋に白馬の姿はなかった。いつもならニックは、丸太壁の内側から、ベッドフォードの温かい息づかいと、霜が立つ地面を踏む蹄の音を聞くことができた。テンを仕留める罠猟を投げ出して、白馬を探しにかかってから四日目の朝まで、ニックはベッドフォードが命を落としたはずはないと自分に言い聞かせていた。迷子になっただけなんだと。ここ四日間の探索で、ニックは牧草地を巡り、周辺のクリークを上流までたどり、午後も遅く戻ってくると、雪靴の跡がレース模様を描いて彼の足元からのびていた。そうして、翌朝には玄関先で、再び冷たい霞が窪みに留まっているのが見られたが、まるで前日の通りがかりに残した息のようだった。

残すはあと一か所 —— キャビンのちょうど裏手を上って六マイル、沼沢地と荒地の先にある段丘に向かうしかなかった。そこはハイバレイと呼ばれていたが、ニックには由来の見当はつかなかった。というのも、バンクスマツと倒木が絡まりあっているだけの傾斜地にすぎなかったからだ。

それでも、名付けの良しあしはともあれ、呼び名があるのはありがたかった。名のある方が、くつろげて温かい気持ちになれた。一帯で、名付けられているの

はクリークと、ブラック・マウンティンと呼ばれる山だけで、どの丘も名無しだった。ニックが年に数回通る、町と鉄道に通じる峠には、きちんとした名称がなかった。町側からは、「リトルヘイ川に至る峠」として知られており、そこを利用する北側の罠猟師や自作農場入植者[2]は、「町に至る峠」と呼んでいた。そのことは、ニックとスウェーデン人の友人オラフの間でこれまで話題になったことがあった。彼はリトルヘイ川のずっと下流で罠を仕掛けていた。彼に言わせると、故国では、どこもかしこも名が付いていたが、この辺の麓丘で、峠といっても名無しの低くてなだらかな峠など、今さら名付けられる心配はないとのことだった。

ハイバレイは例外だった。そこは誰の記憶にもない昔から名が付いていた。ベッドフォードがキャビンの所からさ迷い出て、身を寄せるか餌を探しに行ったのかもしれなかった。キャビンを出て牧草地を横切ったニックは、今や白馬を追って登りにかかっていたが、雪は沸き立つように両脚にまつわりつき、雪靴はすっぽり雪の中に沈み込んで、膝をついて歩いているように思えた。ひどく寒かった。空気で鼻の孔がヒリヒリして、唇から漏れる息は音を立て、灰色の口ひげから氷柱が下がり、眉毛の上にも氷の粒ができた。

彼は、オオカミの足跡を見つけた —— 全部で五匹、母オオカミが一緒に生まれた子らと連れ立って獲物を追っていた。それからずっと先では、ムースが、森の斜面の、彼が通路にして登ってゆく山道をかき乱していた。

ニックは歩きながら、ベッドフォードと行動を共にした道中を思い出した。自分も馬も若くて、振り返ると、あの頃の年月は青々として、谷は緑、きらきら光る渓流が脈々と流れ、草がこんもり勢いよく生い茂って…。彼の記憶は、大陸横断鉄道[3]が山岳地帯まで分け入って来た頃にまで遡っていた。1908年頃のこと、ニックは荷物係として身を立てていた。彼は荷馬の群れを引き連れ、アルバータ州の鉄道終端駅があったエドソンから、測量隊のキャンプ地まで物資を運んだ。麓丘の間をぬって、アサバスカ川流域[4]に物資を届けた。背後に聳えるカナディアンロッキーは、青みがっかった氷河をいただいていた。荷物を下して、荷馬の鞍を外した折りには、測量技師のベッドフォード氏が、自分のテントにニックを招き入れ、グラス一杯のウィスキーを振る舞った。

ベッドフォード氏は —— ニックにはファーストネームがあるようには思えなかったのだが —— 長身痩型のイギリス人で、血色の悪い両頬に挟まれた赤味がっかった鼻は、慢性の炎症を起こしているように見えた。風の吹いているところから屋内に入ってくると、実際、風で痛めたかのように、両目に涙を浮かべていた。彼は毎日、鉄道線路の現場での仕事を終えると、汚れた服を脱いで、クリークの土手に用意させたドラム缶の風呂に入った。それから黒いスーツに白いシャツ、黒の蝶ネクタイを身に着け、シルクの靴下にエナメル革の靴を履いて、テントの前を行ったり来たりした。歩きながら、眼鏡に取り付けた黒の長いひもを首回りに垂らして、眼鏡を磨いていた。彼は、白い防水クロスをかけた折り畳みテーブルをテント脇に設えて、現場で一番の若手（すでに風呂の用意を済ませた）測鎖係が運ぶ夕食を食べた。ニックは、こんなことがすべて、テント暮らしの人間にしては文句なしの偉業のように思えた。それでも後になって一番注意を引いたささいなことは、こういった折りにベッドフォード氏がシルクのハンカチを袖にたくしこんでいることだった。その時まで、袖から出てくるものと言えば、片手か、たまにはトランプの二つしか見たことがなかったからだ。

この年の作業を終えた後だった、鹿毛の荷馬が斑の子馬を産み落としたのは。斑の毛は日が経つにつれ、白一色に変わった。ニックは、ベッドフォード氏と近づきのあったことに敬意を表して、白馬にその名を頂戴した。子馬は脚が長く、背峰が盛り上がって、片目が青かった。乳離れしてから、子馬は山腹の群れから少し離れて餌を食べた。ニックが名付けをするきっかけになったのは、子馬にそんな単独行動の習性があったからだ。

やがて、ベッドフォード氏と他の測量技師は任務を終えて立ち去った。彼らが目印を付けた山道に沿って鉄道線路が敷かれた。まもなく蒸気機関車が唸り声を上げてアサバスカ川流域を通り抜けた。ニックは鉄道の侵略に憤って、北部の丘陵地に退き、キャビンを建て、罠猟の縄張りを敷いた。しばらくの間、ニックは六頭の荷馬を手元に置いて、秋の罠猟の旅に同行させた。年月を経て、罠猟に出かける回数は減り、彼の荷馬は姿を消していった。その中の一頭は、ロッキー大分水嶺の向こう側の入植者に売り渡した。別の一頭は、オオカミに追いかけられて果てた。残りの馬は雪の中で行き倒れになったか、あるいは新緑の春草につられて行ったものの、弱ってへたり込み、どこか南に面した山腹の窪みから起き上がれなくなった。

最終的にベッドフォードだけが留まった。カナディアンロッキーの麓丘で生まれたベッドフォードは、平原地方から連れて来られた他の馬たちよりも長生きし

た。ニックは思い起こすことができた。ベッドフォードが子馬だった頃から数えて30年、半生に相当した。連れ立って年老いてきたが、白馬は彼の一年に対して二年分の歳をとってきたように思えた。馬は、30歳の今、飼い主が荷物係として出発した時点で、引退しようとしていた。

ベッドフォードは、アサバスカ川流域ではおそらく最古参の馬だったが —— ニックは鉄道敷設時代から生き残った馬は他に思い当たらなかった —— ここ何年も働かせてはいなかった。白馬は、放し飼いで草を食べていた。加齢で関節はこわばり、歩くと健がピシッピシッと鳴る音が聞こえた。大方は身近にいて —— 草は豊富で、ベッドフォードの独り占めだった —— 日向かキャビンに差し掛けて設えた馬小屋でうつらうつらしていた。長いことじっとしているため、蹄の先が伸びて球節に体重をのせて身を支えねばならなかった。歯が抜け落ちてしまい、馬の糞には、丸ごと飲み込んだ草やヤナギが消化されずに残っていた。

ニックは、白馬が蠅から逃れてたどったクリーク沿い、砂州、ヤナギの茂み、雨風に追われて行った森林の中で、干からびた糞を見つけた。ニックは糞のそばで一度ならず、失望と怒りが相半ばする思いで、頭を振った。糞の様子が証拠立てている衰弱が、まるで彼自身のものであるかのように、はらわたの内部で痛みが走った。寄る年波はニックが白馬と分かち合う定めだった。歳月を経て、縄張りの範囲は、80マイルから60マイルへ、60から40、40から30マイルへと狭まり、今ではとうとう、週毎の見回りで、捕獲物を回収するのに20マイルしか行けなくなっていた。

連れ立って長い道のりを行き来したのだった —— 老齢による窮状がベッドフォードの旅の終わりを予告してはいたが、白馬が、旅の始まり、すなわちニックの若かりし日々、青春時代をしのばせる唯一の絆であることに変わりなかった。あの頃、ニックは真っ赤なシャツを着て、物資を運ぶ荷馬を先導し、ベッドフォード氏とウィスキーを飲んだ。終日狩りで山に登ったが、坂道で立ち止まって息継ぎする必要などなかったし、仕留めた獲物を肩に担いでキャンプに戻っても疲れ知らずだった。

ここ最近、仕留めた毛皮を町に運ぶときに、ニックはベッドフォードに乗ることはなかった。ベッドフォードは荷馬で、乗馬用に慣らしてはいなかったし、荷物を運ばせるには歳をとりすぎていた。彼は白馬に鞍を載せて、インディアンの飾りのついた手綱を引き、峠を越えて、30マイルの道のりを鉄道まで、休み休み歩いて行った。その姿を笑う人たちもいた。町では、少年たちが石を投げつけて、あの老人は怖くて老いぼれ馬に乗れないんだと囃し立てた。ニックは轍の上に唾を吐いて、連中に向かって拳を振り上げた。何はともあれ、誇り高き男が、馬を同行させずに、あるいは馬具なしで、町に行くこともなければ、ベッドフォードのように老いた馬に跨ることもなかった。

それからリトルヘイ川のキャビンで過ごした夏の夕暮れ。夕食時に、ベッドフォードは開いた窓から頭部を突き入れて夕日を遮ったので、キャビンの中は、早々と夕闇が立ち込めた。鼻の孔を広げて、テーブルの上のパン屑を吹き飛ばしたり、口先をぎこちなく使って用意してやったオートミールを掻き集めたり、冷ますために置いてあったバノックを齧ったりした。時には砂糖の入ったタバコの缶に鼻をこすりつけて、ひっくりかえすこともあった。そのことで喧嘩になり、ニックは声を荒げることがあった。そんな時、ベッドフォードは引き下がって、牧草地までギクシャク歩いて行き、腹まで草に埋もれたまま頭を上げると、ヒヒーンといなないた。

太陽は傾きはじめていた。キャビンの所から、数分毎に立ち止まって息継ぎをしながら、雪の中を登ってきたニックは、ハイバレイで、ようやく白馬に行き当たった。ベッドフォードは、発育不良のバンクスマツの木立の中にいた。幹に倒木が絡まり合って、今までのように、しっかり囲い込まれていた。下顎が垂れ下がって、黄色い奥歯がのぞき、片耳は立っていたが、青い方の目はどんより眠たげに見えた。雪の衣と髭をまとった白馬は、木に肩をもたせ掛け、尻を下して座っていた。ベッドフォードの骨と皮になった胸部は膨れ上がり、寄る年波であばら骨の間隔が広がっていた。傍に立ち尽くすニックは、白い小山になった糞を蹴飛ばした。馬は何日かそこで身動きできずに、樹皮か枯れ枝をかじっていたが、弱り切って、前足を伸ばして少ない貧弱な草を引っかくこともできず、まして力を振り絞ってそこから脱出し、下方の森林地を越えてゆくこともできなかった。白馬は、寒さで動けなくなり、後ろ脚はくずおれてしまい、凍り付いて硬直していた。

ニックは両手からミトンを外すと、首から紐で吊り下げていたミトンがポトンと落ち、両腿に当たって音を立てた。彼は歩みより、右手で背峰を軽く叩いて、こわばって直立した毛を慣らし、たてがみの根元の軟骨に指を添えて、左手を砂糖かオートミールが入っているみたいに丸め、馬の口元へ、冷たい、息の絶えた

鼻の穴に当てがった。雪は、たてがみから、雪靴でできた丸い無言の窪みの中に落ちた。雪は、ベッドフォードの周りに降りしきり、ゆっくりと絶えず水嵩を増す洪水のように馬の脇腹に打ち寄せていた。雪は丘という丘に、山また山に、人知を超えて、見渡す限り、深々と降り積もっていった。太陽は雪の上に彼らの影を投げかけた。二つの影は、黒々とした深みのような広がりの中で一つに溶け合った。ニックは白馬に顔を寄せ、ひと言ささやくと、その場を離れた。彼は雪の深みが両足を支えていることを意識して、水かき状の雪靴を履いた足を注意深く置きつつ、もと来た山道をたどってキャビンまで下って行った。

しばらくして川床を横切るとき、彼は立ち止まって聞き耳を立てると、氷の下の水音が雪靴越しに聞こえ、足底に水の波動が伝わった。ここ下流域では、昼間に雪が解けて、夕方になった今、雪の上に薄い氷が張っていた。ようやく川の分岐点と、左手上方に町への峠、名無しの峠が見えてきた頃、ニックは、はっきりと身近に、馬の鈴がガランゴロンとなる音が聞こえた。まるで、向こうのエゾマツの傍に身を寄せている馬が、頭を振ったかのようだった。ニックは歩みを止めなかった。百マイル四方、馬の鈴などなく、独りっきりになった男は、一番聞きたいものが聞こえるのだということを知っていたからだ。

ニックは、キャビンに入る前に、それが建っている小山の麓で一息つき、あらためてキャビンの寸法を目測して、値打ちを確認した。頑丈な造りのキャビンで、丸太をしっかりと丸入れにして繋ぎ合わせて隙間を埋めてあった。屋根は雪がのしかかっても乾いたままで、びくともしなかった。小山の上に溜まる漂流物に打ちつけられても、キャビンは当分持ちこたえそうだった。

キャビンの中で、ニックはランタンを灯し、梁に吊り下げた。ストーブに火をつけ、寝台まで行き、毛布とマットレスを巻き上げて、隙間風を締め出すために敷いてあった新聞紙を取り出した。新聞の裏手にある、部門別広告を載せた紙面だった。経験からニックは、活字の詰まった頁を敷くと、一番温かいことがわかっていた。大見出しのある頁は風が筒抜けだった。ニックが参考にしたかったものがそこにはあった。男たちが職探しをしたり、小物を売りに出したり、友人や親戚、失くした物の行方を尋ねたりする小さい文字列の中に。

彼は二種類の広告、一つは「追悼欄」、もう一つは「尋ね物・尋ね人欄」を調べた。彼は二つ目が気に入った。大切なもの、本当に価値のあるもの、それを抜きにしてはとてもやってゆけないようなものを失ったことを示すために、懸賞金を公示するという考えが気に入った。

夕食後、ニックがキャビンで探していた眼鏡は、鏡の後ろの棚の上にあった。スチールの枠で両耳に掛けるタイプの眼鏡だ。鉄道の測量技師ベッドフォード氏が付けていた眼鏡とは似ても似つかなかったろう。ニックの眼鏡には実際、黒の長い紐はついていなかった。それでも、同じ役には立った。両目の周りにスチールの枠を付けると、ニックは鉛筆を使って見積もったり作業したりする気になった。

彼はスモモの木箱から片端を叩き落として、板が白く手触りがよくなるまで、斧の刀身を使って表面を滑らかにした。彼はランタンを下して、ティーポットの脇に置き、ナイフを使って、その板を彫り始めた。作業しながら、新聞の部門別広告に目をやりながら、しきりに眼鏡を外して、出来栄えを確かめた。その後、鉛筆を使って彫り込んだ文字を黒く塗りつぶした。ストーブの火が弱まるにつれて、指がかじかんできて、ランタンに吹きかけた息でパイプの火が消えた。

作業をすっかり終えると、ニックは厚手ウールの上着と、ミトン、ビーバーの帽子を身に着けた。外に出たところで、しばし佇み、消えかかった月を眺めた。彼は荷袋を担ぎ上げ、斧を手にして、町へ向かう山道が二手に分かれた所まで、雪靴で8マイルの道のりを進んだ。彼は、一本マツの裾周りの枝を斧で切り落とし、幹の一部を平たく削った。雪が解けて地面が顔を出した時に、人の頭の高さより上にくる冬場の道しるべだった。彼はそこに掲示板を釘打ちし、山道を上り下りする誰からも見えるように据え付けた。

ニックは、霜のついた鉄釘でヒリヒリ痛む指先に息を吹きかけ、足踏みしながら、一歩下がって、完成品を眺めた。掲示板にはこう書かれていた ――「白馬ベッドフォード失踪、飼い主は謝礼」、最後に「ニック・ダーバン」と自身の名が彫り込んであった。

これからの季節、少なくとも十数人の男たちが、掲示板を見かけて、読むことだろう。罠猟師の連中で、ずっと北の地域から、春に毛皮を運んできて、夏と秋には、物資を持ち帰ることだろう。それぞれが掲示板を二度目にすることになるだろう。

スウェーデン人の友人オラフ、自分でカバの木を切り倒し、少しずつ削って作ったスキー板を履いて移動する彼も、掲示板を読むだろう。厚い胸板の上に、モミの若木のように乗っかった黒いあご髭を撫でながら、見上げて読むことだろう。「おお、いい馬だ、立派な

馬だ」と言うだろう、頭を振って、茶色い嗅ぎタバコの軸を吐き出しながら。ベッドフォードにバノックを食べるよう仕向けたのはオラフだった。彼はニックのキャビンを訪れる度に、わざわざ土産用にと、こんがり焼いた丸いバノックを持参した。

それに、山岳ガイドで装備屋のフレッド・ブルースターも、秋には恒例の狩猟ツアーの一行を引き連れて通りかかるだろう。彼は掲示板を見て、東部[5]の金持ち連中、ツアー客に向かって大声で読み上げ、彼らにベッドフォードのことを語ることだろう。そうすれば、彼らはベッドフォードが良い馬なのだと知ることになろう。良い馬でなかったら、飼い主は、謝礼を出す気にはならなかったたろうと。

近隣の男たちは理解してくれるだろう。連中なら、白馬を探しに行くことはなかろう。年老いた姿を目にしていたから。ニックが自分の馬を見つけられないとなれば、ベッドフォードが誰の手にも届かないところにいるのは百も承知というものだ。

ニックは、朝日で金色に染まった雪の中、自分の影を踏みながらキャビンに戻って行った。ハイバレイの高みで、オオカミの遠吠えが一声、それからもう一声続くのが聞こえ、身体が縮み上がって、みぞおちに悪寒が走った。オオカミの群れはベッドフォードを見つけたことがわかった。

雪解けが始まった三月下旬、ニックは町に出ることにした。以前は、ほとんどの雪が地面に染み込んで、同行する白馬が歩きやすくなるまで待った。今や彼は、一冬の収穫、テンやイタチの毛皮、それに森林の高地で罠にかかった二匹のシルバーフォックスの毛皮を背負って、独りで出かけた。

掲示板を打ち付けた、山道の分岐点が近づくにつれ、ニックの歩みは早まった。彼は一本マツの傍で立ち止まった。自分より先に誰かが来ていた。雪の上に、茶色い嗅ぎタバコの汁が点々と落ちていた。掲示板の下、オラフが立ち止まって読んだ場所には、スキー板の跡が残っていた。彼はそこに立ちつくして、頭を振り、髭をなでたんだ。それから彼は、分岐点の向こう側の分かれ道を下って、自分のキャビンに戻った。雪の上に書き記したように、その場の状況は一目瞭然だった。その足跡は、雪解けの前にできた三四日前のもので、輪郭がぼやけていた。新たな輪郭のはっきりした足跡が、それを横切って峠の方に向かっていた。どうみても、オラフが町に行く途中、ここまでやって来て、一本マツの所で、一旦引き返したのだ。山道を 10 マイル下ったキャビンに忘れ物をした。それから、一日二日して、彼は出直した。今回は、掲示板の所で立ち止まることはなかった。

ニックはオラフが峠に向かってスキー板を踏んで行った山道を雪靴でたどった。樹林を越えて、峠の頂が近づいてくると、最初はオラフが、道案内のために雪の中に設えた、道標らしきものが見えた。それにしては背が高く、どっしりし過ぎており、それは道の上でも脇でもなく、25 から 30 フィートほどの高さで、岩壁の近くにあった。一本の支柱でもなかった。近くの地滑りのあった場所から運んできた石で二本の柱が支えられていた。それらは、縦 2 フィート、横 3 フィートのフレーム板を掲げていた。内側には、樹皮を剥いで蒸気をあてたエゾマツの若木を使い、文字を形作るように曲げて釘が打ち付けられていた。

ニックは瞬きして、両目を擦り、その文字が形作っている言葉を理解しようとした。長い単語と短い単語が上下二段になっていた。そうして、ごつごつした岩壁を背に、それらは一つになり、ニックの前に立ち現れた。「ベッドフォード峠」と綴られていた。

ニックはリュックを担いだ両肩をもぞもぞ動かし、まるで地面が熱いかのように足踏みしながら立っていた。自分でスキー板を作るオラフは、理解してくれたんだ。分かれ道のところで掲示板を目にしたオラフは、キャビンに戻って、エゾマツの若木を切り、樹皮をむき、蒸気を当てて折り曲げ、板に釘で打ち付けた。それを峠まで運び、二本の直径 4 インチのバンクスマツを切り出して支柱に据え、そこにワイヤーでフレームをくくりつけたのだ。木屑や樹皮が、縦横無尽についたスキー板の跡の上に散らばっていた。作業が完了すると、彼は引き続き町へ向かった。

オラフの故国にある峠のように、ここの峠に名が付いた。「峠には自然に名が付く」とオラフは言っていた。「誰もいちいち命名したりしない」と。ニックは昔かわした二人の会話を思い出した。

彼は名称が正しく綴られているか確かめるべく、一文字ずつ念入りに確認した。「べ」の文字がもう少し大きい方がよかった。それでも峠の名は、何カ月も何年も、空と大地の間に、高々と立ち続けるだろう。人々は、その名の由来を尋ねるだろう。誰かが、白馬ベッドフォードのことを、開拓初期にアサバスカ川流域に留まった最後の馬のことを語るだろう。

いずれ、誰の記憶にもなくなる時が来る。ベッドフォード峠は、ハイバレイという名称のように、一つの呼び名になることだろう。おそらく、谷底から強い風が吹

き上げるか、あるいは単に、九月初めにムースかトナカイが角袋を擦り付けるかして、支柱を倒すかもしれない。そうして、名は、地面に沈み込んで、その一部になるだろう。

ベッドフォード峠を通った最初の男ニックは、オラフが一足先に向かった町と鉄道の方角へ雪靴を向け、山道を下って行った。ベッドフォードは今や一つの名になった。オオカミが餌食にすることもない。ベッドフォードの名は、骨や身、皮や毛よりも長生きするだろう。男たちが川の源流までさかのぼり、通りかかった峠の名を風に向かってつぶやく限り、ベッドフォードは生き続けることだろう。

付記

本作品の邦訳に際しては、大学英語教育向けの購読テキスト、*The World of Canadian Short Stories*, vol. 2（現代カナダ短編小説集 2）収録の “The White Horse” の英文を使用し、筆者自身による注釈と「作品の導入」の記述を参照した。

同英語テキストシリーズの Vol. 1 収録の短編小説 Sinclair Ross, “The Lamp at Noon” の英文邦訳「真昼のランプ」を「カナダ文学名作短編小説 2」の見出しで、樟蔭英語学会誌『英語と文化』第 8 巻に掲載ししている。もう一篇のカナダ文学らしい名作短編小説である。

注

1）原語では ‘packer’（パッカー）というカナダ英語で、荷馬やラバを使って品物の輸送に従事した山男をさす。一般には梱包業者を意味するため、「荷物係」の訳語を当てている。オヘイガンの世界では、大陸横断鉄道敷設時代に測量隊の荷物係として働いた男たちを「パッカー」と称している。さらに、ニックが後半生の生業とした ‘trapper’（罠猟師）、フレッド・ブルースターの ‘the guide and outfitter’（山岳ガイド兼装備屋）は、カナダ英語として馴染みがある。

2）北米の西部開拓史上の用語で、西部の入植地を無償で手に入れた者をさす。カナダ連邦政府は 1872 年に ‘Homestead Act’（ホームステッド法）を制定し、一定の条件を満たす入植者に国有地を譲渡した。

3）「白馬」は、カナダ第二の大陸横断鉄道、グランドトランク太平洋鉄道の敷設時代を時代背景としている。米加国境とほぼ平行して走る二本の鉄道路線のうち、ニックがパッカーとして活躍した 1908 年に、イエローヘッド（現ジャスパー）の峠を越えたとされる北側の路線。1867 年に 4 州から成る自治領として出発したカナダの歴史において、大陸横断鉄道は「海から海へ」またがる領土の実現を目指すカナダにとって死活問題だった。1885 年に完成した初の横断鉄道に対して、北寄りの路線は、拡張主義的な米政府への対抗措置として計画された。いずれにせよ、オヘイガンの世界において、蒸気機関車を走らせる鉄道は文明開化のシンボルであり、登場人物は鉄道線路との距離いかんによって、その特性が付与されているようだ。

4）アサバスカ川は、全長 1,231 キロ、コロンビア大氷原に源を発し、北のジャスパー国立公園を貫流し、アサバスカ湖に至る。北極海に注ぐ大河マッケンジー川の最南端の源流をなす。カナディアンロッキーに至る最初の輸送道は、アサバスカ川沿いをジャスパーまでゆき、荷馬を使ってアサバスカ峠を越えた。

5）カナダ東部といえば、中央カナダのトロント、オタワを擁するオンタリオ州と仏語圏ケベック州をさすが、オヘイガンの世界で、東部といえば、ケベック州の大都市モントリオールを想定していることが多い。作家は、西部出身ながら、大学はモントリオールにある英系のマギル大学に通った。作家後期の長編ロマンス『スクール・マームの木』（*The School-Marm Tree*, 1977）のヒロインが憧れる都会は、ご多分に漏れずモントリオールである。

《訳者解説》

「白馬」（“The White Horse”）は、イギリス系カナダ文学を代表する作家ハワード・オヘイガン（Howard O’Hagan, 1902–82）による短編小説である。1963 年に、複数の雑誌に発表されたショート・ストーリーを集めて編まれた短編集『ジャスパー駅で列車に乗り込んだ女、その他の物語』（*The Woman Who Got On at Jasper Station and Other Stories*）に初収録された。「白馬」は、マクミランやオクスフォード版のアンソロジーにも採録されており、カナダ文学の名作短編小説の一つに数えられる。オヘイガンの短編集で、現在入手できる原典は、後述する『未開地の男たち』（*The Wilderness Men*, 1958）の第二版と『ジャスパー駅』第二版を一本化した短編集『木は孤独の友』

（*Trees Are Lonely Company*, 1993）である。

作者オヘイガンは、再評価された長編小説『テイ・ジョン』（*Tay John*, 1939）によって、カナダ文学史上、重要作家の仲間入りを果たし、先駆的なこの小説はランドマークとして位置づけられるようになった。同じくカナディアンロッキーを舞台にした「白馬」は、作家の生い立ちと山での経験を色濃く反映している。

ハワード・オヘイガンは、1902年アルバータ州レスブリッジに、開業医の長男として生まれた。大方は『テイ・ジョン』の舞台、イエローヘッド湖の地域で育った。1922年に優等で経済学と政治学で、25年には法学士としてマギル大学を卒業した。夏期休暇中は故郷のカナディアンロッキーの山で過ごすことが多かった。測量隊の測鉛手として働いたこともあり、「白馬」に実名で登場する有名な山岳ガイド、フレッド・ブルースターの元で観光客や狩猟隊の道案内や荷物係の仕事に従事している。オヘイガンの作家としての資質は、このような山の経験に育まれたものと考えられる。

卒業後は、新聞、雑誌のレポーターや鉄道会社の広報部門の仕事をあれこれこなしながら、20代から30代にかけては主にニューヨークやアルゼンチンに暮らした。バークレーに居を定めた1934年に、当時カリフォルニア大学の教授で美術専攻のマーガレット・ピーターソンと出会い、翌年結婚。50年には、辞職した妻と世界各地を回り、旅を住処としつつ、レポーター兼短編作家として知られるようになった。

処女長編小説『テイ・ジョン』は、大戦前夜の1939年にロンドンで出版されたが、日の目を見たのは35年後だった。再評価の経緯や作品の文学史的な意義については、拙書『英系カナダ文学研究』第五章「現代カナダ小説の先駆け―ハワード・オヘイガン『テイ・ジョン』の語りと多声を巡って」及び邦訳『テイ・ジョン物語』の「解説」を参照されたい。

次の単行本『未開地の男たち』（*The Wilderness Men*, 1958）がニューヨークの出版社から出たのは19年後である。これはノンフィクションの体裁をもつ物語集で、白人やインディアンの特異な男たちのエピソードがそれぞれ全10章で取り上げられている。

「白馬」のストーリーは、『未開地の男たち』第9章「モンタナ・ピート求愛譚」（“Montana Pete Goes Courting”）中の体験談が元になっている。白馬の失踪と死を巡るエピソードは、罠猟師モンタナ・ピートが、彼を訪れた旧友の山岳ガイド、フレッド・ブルースターと同行者に語った体験談の一つである。ピートは、同書「黒いゴースト」（“The Black Ghost”）に登場するマクナマラ老人同様、オヘイガンの分身的人物が聞き手となった、実在のいわゆる「古参」かつ「一匹狼」である。

モンタナ・ピートの前座的な体験談では、イギリス人の測量技師、ベッドフォード氏にちなんで名付けた彼の荷馬ベッドフォードが、老いぼれ馬になって、雪の中で凍えていたのをどうすることもできなかったこと、夜に飢えた狼の呼び交わす声が聞こえたと締めくくられている。「モンタナ・ピート求愛譚」の大半を占めるエピソードがピート自身の一人称語りを再現しているのに対して、物語の冒頭で紹介される老いぼれ馬の顛末は、淡々と語り直された物悲しいエピソードで終始している。ドキュメンタリーとしての短いエピソードが、いかにして「白馬」という一篇の文芸作品として生まれ変わったのか。

「ネイミング」は、「白馬」のプロット展開の要となっているが、それがカナダの未開地にこだわった作家のキーコンセプトをなしている点に触れておきたい。『テイ・ジョン』第二部において、三人称語りを引き継いで、突如一人称で語り出す山男ジャック・デナムは、作者がネイミングの意義を伝えるための狂言回しの役割を果たしている。

> 呼び名のない土地を眺めると身体がへとへとになる。名というのは地平線のこちら側にそれをつなぎとめる魔法だ。それに名をつけて地図に載せると、それで自分のものになる。名のないもの――それはむき出しにされた暗闇だ。（『テイ・ジョン物語』74頁）

ここには、「ネイミング」によって未開地を所有せんとする「白人の論理」が透けてみえる。作者オヘイガンは、表題主人公テイ・ジョンが、灰色熊と闘う場面を目撃したデナムの体験談を、アイロニーの餌食にしている。デナムは渓流の向こう側に現れた金髪のインディアンを「イエローヘッド」と名付けて声援を送り、白人の語彙で「人間対荒野の叙事詩的な闘い」と意味付けるが、彼の語りは傍観者の独りよがりに終始する無益さを自己暴露している。

『テイ・ジョン』では、随所に植民地支配の構図とそれに潜む暴力性が比喩的に提示されているが、作家は同時に、「名付けられていない土地」たるカナダが、「ネイミング」によって独り立ちしてゆく過程を、思い入れを込めて描いてもいる。起業家アルフ・ドブルが撤退し、彼の痕跡がイエローヘッドの土地から跡形

もなく消え去った後も、鉄道の駅にスイス名ルツェルンが残り、司祭トーマス・ローティが謎の死を遂げた山を、男たちが「司祭の山」と呼び始めて一つの名が生まれる。

老いぼれ馬の物悲しいドキュメントから、短編小説に昇華された「白馬」においては、作家が長編小説で仕掛けたアイロニーは影を潜め、ネイミングが未開地開拓に伴う人間の営為として前景化されている。さらに「モンタナ・ピート求愛譚」の冒頭部と同じ三人称語りでありながら、事実関係のみを伝える前者の語りとはうってかわり、「白馬」では、ニックを「視点的人物」に据え、彼の意識を通して眺めた外界の様子が提示されているため、作品は一人称語りのような臨場感を湛えている。

「ネイミング」のテーマは、物語の導入部で伏線としてプロットに組み込まれている。ベッドフォード探索の途にあるニックの想念の背後で、名称、ネイミングが孕む「恣意性」の概念が、まず提示されている。最後の心当たりとしてニックが向かった場所で、何の変哲もない傾斜地に「ハイバレイ」の名が付いている一方で、罠猟師たちが行き交うなだらかな峠が「名無し」であるという対比は、ネイミングの「恣意性」を如実に例証している。『テイ・ジョン』にあっては、「恣意性」の概念は真相の「非決定性」「不確実性」と結びつき、脱構築批評で取り沙汰されたが、「白馬」において「名」は、人々の暮らしを支える言葉としての役割を果たしている。それは、ニックの「（ハイバレイの）名付けの良しあしはともあれ、呼び名があるのはありがたかった。名のある方が、くつろげて温かい気持ちになれた」との思いに込められている。

さらに、政治的・社会的レベルで「所有」や「支配」を含意する「ネイミング」が、「白馬」では、「命名」するという人間の営みとして描かれている。毛色で識別される習わしの荷馬が、命名されることによって、固有の「アイデンティティ」を得たことになる。「尋ね馬」の掲示板を思いつくニックにとって、凍え死んだ老いぼれ馬は、ネイミングによって我が物にした所有物というより、命名を経て、半生を共にしたかけがえのない伴侶にほかならない。ここには「生」の証を求めてやまない人間の姿がある。そんなニックの気持ちを友人のオラフは理解した。雪解けの始まった「町に至る峠」には、枝文字で「ベッドフォード峠」と記された道標が、大きく高々と掲げられていた。

オヘイガンの短編小説の中でも、「白馬」が、ひときわ読者の心を打つのは、ネイミングに込められた人間の「思い」が描かれているからだ。やがて名称の由来は男たちの記憶から消え、道標は倒れて土に帰っても、死すべき運命にあるものが目に見えない姿に形を変えて生き続けるという万感の思いがそこにある。

主要引用文献

O'Hagan, Howard. *Tay John*. 1939. Toronto: McClelland and Stewart, 1989.『テイ・ジョン物語』長尾知子訳、大阪教育図書、1996 年。

____. *Wilderness Men*. New York: Double Day, 1958.

____. *The Woman Who Got On at Jasper Station*. 1963. 2nd ed. Vancouver: Talonbooks, 1977.

____. *The School-Marm Tree*. Vancouver: Talonbooks, 1977.

____. *The Trees Are Lonely Company*. Vancouver: Talonbooks, 1993.

____. "The White Horse." *The World of Canadian Short Stories*. vol. 2.（現代カナダ短編小説集 vol. 2）大阪教育図書、1998 年。

長尾知子『英系カナダ文学研究―ジレンマとゴシックの時空』彩流社、2016 年。